

訪問日：2017.7.26 / エリア：浜松市

NPO法人 クリエイティブサポートレッツ

回答者 久保田 翠さん(NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長)

右より3人目が久保田さん



活動の経緯

もともとNPO法人クリエイティブサポートレッツ（以下、「レッツ」と表記）は、重度の障害のある久保田たけしをはじめ、自分たちのいられる場所が欲しくて作りました。はじめは、集まる場所を作ることを目指して助成金に応募していました。現在は、福祉施設アルス・ノヴァを作ったことで、生活介護、自立訓練、就労継続支援B、放課後等デイサービスの形態を取り、スタッフ、利用者を含めた一人ひとりが集まる場所を失うということがなくなりました。アルス・ノヴァのある場所は道路に面していて危ないので、どうしても鍵をかけないといけません、だれでもウエルカムです。

レッツは、アート系NPOとしてスタートして、創造性を生かす文化事業をずっとやってきた過程で、障害福祉の施設を作りました。作品づくりのような、事業の一部としてアートをやっているわけではありません。障害のある人を核にしなが、ソーシャル・インクルージョンセンターを作ることテーマとして運営しています。

レッツにとって障害者福祉とは

福祉は豊かな社会を作ることには挑戦することができ、そこで税金などが活用されているチャンスのある事業です。だから福祉には、豊かさを作り出すチャンスがあると思います。職員は障害のある人々と毎日接していると、友人になり、彼らの幸せに気づき、関係の中の豊かさを知ります。彼らが、一歩施設の外に出たときに、障害やそれを持つ人に対して、持たれているイメージや言われていることについて何かを感じ、次の事業を企画する動機になっています。

施設は、税金でまかなっていくことができます。そして、その施設から社会にどんどんアクションを起こしていく、社会を変え

ていく。それが正しい税金の使い方であり、公共事業だと思っています。税金を使い、人里離れた山奥に施設を作って、誰も来ない場所で自分たちだけにいることに満足している方が問題でしょう。

最近、障害者福祉の法律が変わって、就労がより求められるようになりました。働くことが自立であるとは納得できません。自立というのはお金を得ることではなく、一人の人間として認められるということ、仲間が増えるということです。これまで社会の規範を当てはめられて、それを学べないとされてきた人たちがレッツには来ています。だからここでは、障害を持っていない人、健常の人のモデルに当てはめて仕事をしてもらうことはしません。障害のある人に何かをしてもらうのではなく、そのまま存在することが仕事になると主張しています。

だから「タイムトラベル100時間ツアー」といって、アルス・ノヴァに観光しに来てもらうということが、今、大切な事業になっています。1回のツアーに来てくれるのはせいぜい10人程です。それが年間6、7回。ツアーに来てくれた人は、はじめ衝撃を受けますが、そのうち利用者の名前を覚えて来ます。そうすると別に、怖い人たちでもないことが分かるかもしれない。障害のある人たちは社会にインパクトを与えることが仕事なのです。障害のある人への見方が変わるかもしれないと思っています。こういうことこそ、レッツでやらないと、と思っています。

地域との関わり、 スタッフ・アーティストの課題について

やはり、地域にとっては障害者のイメージはよくないです。この場所が望まれていないという感じ、障害者は私とは関係ないという感じを受けることが多いです。近所の人にはなかなか入って来ませんが、のび公民館のフリマなどを少し覗いてくれる時はあります。レッツに来るのは、基本的に調査に来てくれたあな

障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァのほか、誰もが利用できる私設私営ののび公民館を運営。施設運営以外に、「表現未満、実験室」や、「雑多な音楽の祭典スタ☆タン!!」のように知的障害のある人から地域の人々まで、人々がこだわりを表現し、他者に見てもらえる場を作り出している。

〒 432-8061
静岡県浜松市西区入野町 8923-4
TEL: 053-440-3176
FAX: 053-440-3175

方みたいに遠方の人、それから居場所がない人たちです。

今、福祉関係の出身のスタッフはレッツにはいません。人間を扱うということは、どれだけ支援のプロであっても、答えというものがない作業です。みんな悩みますが、レッツはそれを否定しません。無理に福祉の専門家を入れるのではなく、うちに来た人に福祉の免許を取ってもらうという方法にしています。

アーティストと福祉の関わりを、施設に彼らを派遣してアートをすることに限定しては良くないと思います。アーティストが作品を作るといことがメインになると、福祉の側は、「おもしろいですね、ありがとうございます」とこやかに、おもてなししながら、アーティストと自分たちとは違うんだ、と差異を感じるだけです。福祉の職場・現場を変えていこうなものを丁寧にやらないと、アーティストは結局お客さん扱いになってしまう、施設を利用したということになるでしょう。

アートは新しい見方や新しい価値観を提示するものだと思うので、人は違和感というものを覚えます。アーティストが介在することで、例えば、今の支援のあり方は正しいの？と思っている人が、声を出しやすくなるということができないと、アートが介在した意味があまりないと思います。福祉は効率主義ではないし、相手に基準を当てはめることができないのですから。

だからこそアーティストと福祉施設を結ぶ中間支援は大切です。うちの施設では、アートマネジメントみたいなこと、中間支援を考えることがスタッフの仕事です。

NPO という組織は、ヒエラルキーで動くのではなくて、社会活動をみんな横並びでやっていくことができます。効率主義でないし、誰かをものすごく評価するということをするのではなく、多様な価値観を保つことができるのが好きです。

行政への提案

文化というものが、様々な政策の横串として機能し、色々な市民や、福祉に関することが含まれた文化・芸術政策でないと思いがけないと思います。傑出したアーティストを支援することや美術館などの施設管理、市民の余暇活動の応援、それだけでない文化政策が必要です。行政のお金を使うのであれば、高齢者や障害者や困っている人たちのところに文化がどのように届けられるか、一般の市井の人が幸せになるために、文化がどのように働けるのかを考えてほしいです。生活が突然変わるわけではないですが、考えが変わるきっかけになるかもしれません。市井の人たちが取り組んでいる、ちょっとしたものを取り上げてもらえるようになると、文化は活用されて、新しい幸せを作り出すことになるのではないかと思います。



誰もが利用できるのび公民館の様子